ニュース専修 ウェブ版

2005年8月号

[3面]

奥瀬喜之商学部助教授の講義から―

マーケティングの面白さ 身近なテーマで体感

グループ別に研究成果を発表

奥瀬喜之商学部助教授が担当する「マーケティングリサーチ」では、市場調査の手法（アンケート調査の仕方、統計的分析手法）について、講義とグループワークを交えて展開している。

今年度は、より身近な視点から考えてもらおうと「専修大学」、大学に隣接する「岡本太郎美術館生田緑地」といった指定部門をリサーチテーマに設け、半期の講義とグループワークの後、7月15日には中間報告としてプレゼンテーションを行った。

「専修大学マーケティング」で、専大と同レベルの大学に通う学生にアンケートを実施し、大学を選んだ理由などをまとめたグループは、「大学を選ぶ時点で与えられる情報は単純なものが多く、イメージだけの部分が大きい。分かりやすいマーケティングを展開すればよいのでは。専大は他大学と差をつけられるような強みを持つことが志願者増への第一歩である」とまとめた。

「知識の習得だけではなく、データから何が読み取れるのか。問題点がどこにあるのかを考察する能力の習得も目標としています」と話す奥瀬助教授は、取り組みについて「過去3年間、グループワークのテーマを自由に設定させてきたのですが、問題意識に欠けた発表が多いなと感じており、少しでも学生の意識と現場の問題意識とのギャップを埋めたいと思い、企画しました。今回、身近なテーマについて考えていく中で、学生の多くは、すぐそばにありながらこれまで目を向けることのなかったもの、見えていなかったものに気づき、普段、考えることのなかったことに思いを巡らすことが出来たのではないかと思います。また、大学や地域の構成員としての意識や、それらへの愛着が少しでも芽生えたのだとすればうれしく思います。マーケティングの基本は他者への思いやりです。どう行動に結びつくか、楽しみにしています」と、今後の成果に期待している。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

ニュース専修 ウェブ版

2005年8月号

[3面]

富士ゼロックス留学生研究助成基金にモンゴルからの留学生選ばれる

18倍の競争率を突破して

研究室で岡田教授(左)と

モンゴルからの留学生、ウルジネ・ボロルさん(大学院経営学研究科博士後期課程)が、本年度の富士ゼロックス小林節太郎記念基金「在日外国人留学生研究助成基金」を18倍の競争率を突破して受けることになった。

ウルジネさんはモンゴル国立大学卒。1995年に本学の特別聴講生として来日。修士、博士後期課程に進み、今年、日本滞在10年目を迎えた。研究テーマは「日本企業の経営戦略」。来日当初のモンゴルは、市場経済が導入されたばかりで、日本の経済、とりわけ企業内教育に興味を持った。「良いものをすぐに取り入れ、技術や品質管理への向上心が高い」。その源となる日本的人事管理、組織における人間関係の重要性を研究し、モンゴルのそれと比較。博士後期課程では、90年以降の新しいモデル「ナレッジマネジメント」を研究に取り入れた。博士論文が一段落したところで同助成基金に応募。「発展途上国の人材育成問題」で、モンゴルの企業内教育・訓練に関する実態調査をもとに論文を仕上げる予定だ。

学内の「モンゴル語講座」の講師を務めるなど国際交流活動にも積極的。「将来は帰国して教壇に立ちたい」と夢に描く。留学当初からの指導教授である岡田和秀教授はウルジネさんを、「旺盛な意欲を持ち、勤勉な人です。企業見学などでも積極的に質問をしますし、日本語での論文作成を、たゆまぬ努力で成し遂げています。祖国と日本との関係を縦横に結び付けるような活動を」と期待する。

※富士ゼロックス小林節太郎記念基金「在日外国人留学生研究助成基金」 アジア・大洋州地域からの留学生で大学院博士課程在籍者(研究分野は人文・社会科学)対象。調査研究活動を行うにあたり、費用を研究助成金として支給。05年度は234件応募で採用42件。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

ニュース専修 ウェブ版

2005年8月号

[3面]

「北区つかこうへい劇団」で初舞台

渡邊 慶人さん（経済2）

かけつけた室井教授（右端）とゼミ生に囲まれた渡邊さん（前列右）

「観客との間に気持ちが伝わったと感じる一瞬。最高ですね」。プロの役者を目指し「北区つかこうへい劇団」に所属する渡邊慶人さん（経済2）は、舞台で演じる魅力を語る。8月末の公演に向け、猛げいこに励んでいる。

演劇部に所属していた専大附属高時代、声優に憧れたが「観客と接する舞台に立ちたい」と、たまたま目に入った同劇団の役者コース第12期生に応募。養成所での厳しい訓練を経て入団、大学進学後も日々けいこを重ねてきた。

主宰者のつかこうへい氏は、1970年代から80年代にかけて『熱海殺人事件』、『蒲田行進曲』などで一大ブームを起こした劇作家で演出家。94年、東京都北区を拠点に同劇団を旗揚げ、本格的な役者、演出家の発掘育成に取り組んでいる。

「劇団に入ってから、つか先生の偉大さを知りました。妥協を許さない先生のもとで活動出来るなんて幸せです」と話す。6月、第12期生顔見世公演が行われ、同劇団に入り初めての舞台を踏んだ。所属ゼミの室井義雄教授やゼミ生も観劇にかけつけた。

「うそのない誠実な役者になりたい」と熱っぽく話す渡邊さんは「ゼミ活動はもちろん、大学生活は自分らしさを探る場。懸命に生きること。その中から役者として生きるための何かをつかみたい」と力を込めた。

渡邊さんが出演する「第12期生顔見世公演2／熱海殺人事件三部作一挙上演」は8月30日から9月3日まで、東京・北区滝野川会館で。詳しくは下記のホームページで。

http://www.tsuka.co.jp/

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

a

社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2005年8月号

[3面]

オープンライブラリー

中・高生、大学受験生に 生田、神田の図書館開放

図書館（生田本館、神田分館）では、8月2日から31日まで「オープンライブラリー」を実施している。（土・日及び一斉休暇期間除く）

訪れた中・高生、受験生たちは、快適な閲覧室での自習や図書の閲覧などを通して、大学図書館の良さを認識していた。
※詳細は図書館ホームページで
http://webacc.senshu-u.ac.jp/libif/lib/index.html

＜生田本館＞

＜神田分館＞

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2005年8月号

[3面]

私のお勧めBooks

遣唐使の見た中国と日本 新発見「井真成墓誌」から何がわかるか
専修大学・西北大学共同プロジェクト編

共同シンポでの激論を一冊に
会場は、延べ千人を超える熱心な歴史ファンで埋め尽くされた――。

昨年秋、その存在も知られていなかった日本からの留学生の墓誌が、中国・西安で発見されたという報道は反響を呼び、1月に有楽町朝日ホールと神田キャンパスで開かれた、井真成（せいしんせい）墓誌についての中国・西北大学との共同シンポジウムと市民セミナーは、参加者の熱気に包まれていた。

これだけ多くの人を引きつけて止まないのは、やはり「国号日本」が海外で記された最も古い記録のひとつが新たに発見されたという驚きが筆頭。そして遣唐使として選ばれ、彼の地に渡り官位を得ながら、志半ばにして土に返った有為の才という、大いにロマンティシズムを感じさせるその墓誌の内容がひとつ。さらにこの墓誌の一部が欠落しており、この人に関する記録がほとんど無いに等しいくらい乏しく、議論百出の極めてミステリアスな存在であることも、関心を引く大きな要素になっているのは間違いない。

本書は、西北大学との共同プロジェクト報告という学術的な側面を持ちながら、一方でこうした歴史ファンの興味に十分応えるように配慮されている。墓誌本体から用字、書体などさまざまな内容について論じ、新発見の遺物であるがゆえに、中には研究者の意見が必ずしも一致しないと見受けられる場面もあるが、それらが併記されていることで歴史研究の最前線を感じることもできる、お買い得の一冊と言える。

いま、この墓誌は“里帰り”を果たし、上野の東京国立博物館で展示されている（特別展「遣唐使と唐の美術」9月11日まで）。いにしえより連綿と至る交流の糸を紡ぐこうした活動に、本学が少なからぬ役割を果たしたことを、学生はじめ本学関係者は誇りに思ってもよいのではないだろうか。（朝日新聞社刊・本体1400円＋税）

（広報課）

俳人のための やまとことばワンポイントレッスン
林 義雄著

美しく機能的な用語例を
俳句は基本的に十七音の詩と我々は学校で教わり、事実その通りなのだが、これは詩としてみる限り、ほとんど非常識なまでの短さなのである。実際、いざ俳句を詠もうとすると、その短さは大変な障害となる。たとえば「小学生」ということばがある。日常頻度の高いことばだが、俳句に詠みこむのはかなり難しい。これだけで六音もあり、三分の一が消費されてしまうからだ。俳人は音数の多いことばは滅多に使わない。音数がもったいないからである。わたしもまた学生時代俳句をたしなんでいたが、どうすればより短い表現でより多くの分量のことが言えるか、そればかり考えていた。おそらく現役の俳人はすべて同じようなことを考えているはずである。

本書はそうした俳人たちの悩みに真っ向から答えた好著である。本書にあげられている用語例はみな、我々が通常使う水ぶくれした表現よりもはるかに短く、しかも含蓄に富んでいる。著者である文学部日本語日本文学科、林義雄教授はその深い学識と丹念な博捜でもって、もっとも美しく、短く、かつ機能的な用語例を読者に示している。

本書において何よりも安心感があるのは、そこに提示されている日本語がきわめて正確であるという点である。我々はことばを短く使おうとするとき、往々にしてことばの語幹をゆがめたり、必要な活用を無視したりしてしまう傾向がある。確かに日本語には融通無碍なところがあり、ある種乱暴な使い方にも耐えてくれる場合もある。しかしそれにも限度があり、度を越すと日本語でなくなってしまう。本書にしたがう限り、そのような失敗を犯す心配はない。その上で香気ある表現を最短の音数で選択することができる。

俳句はその短さゆえに、ことばの機能を最大限引き出さねば成立しないという宿命を持つ。そうした宿命と相対するとき、本書は最大の武器となることだろう。（リヨン社・本体1800円＋税）。

（文学部教授・小林恭二＝作家。主な著書に「俳句という遊び」「宇田川心中」「歌舞伎通」など）

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.